

新CATと目録システム講習会 京都大学附属図書館 赤井規晃

まえがき

京都大学図書館は、本年1月よりサービスが開始された新CATシステムの接続第1号館となった(クライアントには富士通の iLiswave を使用)。以来実に早いもので9ヶ月が経過するが、ようやくシステムの的にも安定し、職員の間でも、この新システムによる目録業務が定着しつつある。この間、新システムでの業務を早く定着させようとして、学内での操作説明会や目録講習会を機会ある度に行ってきた。メーカーから提供を受けた操作説明書も貧弱で、しかもあくまで操作手引書の域を出るものではなかったため、例年開催している学内向けのシステム講習会用に、新システム対応のテキストを自作しなければならない羽目にもなったが、おかげで、今秋の、目録システム地域講習会(10月14-16日：京都大学にて開催)で用いるテキストの原型に使っていただけることになった。学内向け講習会のテキストを作ったときは、現行システム講習会のテキストを元にして、画面例を差し替えて、より効果的にNACSIS-CATの仕組みが理解できる形に構成し直そう試みてみた。具体的には、コマンドの流れよりも、システム操作のフローを理解することに主眼をおいた登録実習のパターンの分類に改めようとしたことがそうなのだが、ただ、クライアントシステムがまだ安定していなかったり、新システムについての理解不足などところもあつたりして、十分に意図を反映したものにはならなかった。今回、センター側で編集された試行版のテキストではそのあたりの意図が反映したものになっていると考える。

このレポートでは、新CATで講習会が何を主眼とするのか、その要件を満たすテキストの作成はできるかについて、今回作成されたテキストを事例に簡単な考察を試みた。

新CATと講習会

新CATになっても、目録システムの構造に変化は無いので、講習会で教えるべきことも本質的に変わることはない。ただ、今の目録システム講習会が端末操作の習得を中心にしており、この現状は、新CAT移行が進むとどうしても軌道修正していかざるを得ないだろう。というのも、末端で登録作業を行っている人間が思い描くNACSIS-CATのイメージは個々に異なるクライアントのインタフェースに強い影響を受けることは間違いなく、画面名やフィールド名など共通の理解事項が、UIPに関しては無くなってしまふ以上、これまでもまして、UIPに隠れてしまっている目録システムの概念的な部分の知識をもつことなしには、多様なクライアントの操作ができなくなるであろうからだ。データの品質を一定レベルに維持する観点からみても、このことは真剣に考えざるを得ないのではないだろうか。新CATが普及した将来には、新CATクライアント間のリプレイスを経験することが当たり前になる。そうなったときにも目録システムの仕組みとか構造を知っておくことは、新しいクライアントへの慣れを早めることになる。

新CATで何が変わる？

「平成9年度から、新目録システムNACSIS-CAT2(仮称)の併行運用を開始した。両システムでは、データの転送方式やプロトコルなどが異なるため、接続ソフトウェア(クラ

クライアント)の画面構成や操作方法に違いがある。しかし、扱うデータベースは同一なので、(1)データベースの構造とその取り扱い、(2)目録データの記述(「目録情報の基準」)については共通となっている。」(3ページ)とテキストの冒頭でも記されている通り、従来学情側で管理・提供されていたデータの書きこみ方法とそのインタフェースがクライアントに移植された点が新CAT移行での最大の変化である。したがって、目録業務担当者が常々目にするインタフェースが個別さまざまなのだから、講習会が成り立たないのは当たり前だという意見が出てくる当然予想されるところであろう。

新CAT講習会は不可能？

新CATが導入される以前から、今後の目録システム講習会がどうなっていくのかは関心のある話題だったようである。コマンドもなくなるし、大学によって使用するクライアントが違い、端末操作法が全く異なるというのに、一体全体、講習会がな成り立つのだろうか？という訳である(cf.:新CATメーリングリスト91,94,97,99,101)

新CATになると講習会ができないというのはある意味で正しいが、誤りともいえる。講習会が今のようなコマンド操作・画面展開を学ぶことを中心としている限りではこの主張は正しいが、講習会の本来の意図を考えたときはそうとは言えない。なぜこのコマンドを入れるのかをわからずに、テキスト通りにコマンドを打って、コマンドの順番で目録業務を把握しているような例もみうけられる。これでは、ころもとない。また、新CATになって画面表示も個々別々となって、先に述べたようなレコード調整時で困る状況が起こることを想定した場合に、目録業務を担当する人がそれぞれ自分のクライアントで「 」というフィールド名にあるデータがコーディングマニュアルでいう「 」だとかいうことを知っておかなくてはならないとしても、総合目録データベースの構造やデータの持ち方までその理解を各人にまかせておくわけにも行くまい。

もちろん、目録規則に習熟していないカタログが増えていることやそれが時代の趨勢となっていて、講習会がそれに対応する必要があることについて無視するわけにはいかないが、少なくとも、NACSIS-CATの目録システム講習会が端末操作を学ぶところだという印象があるとすればこれは払拭する必要があるだろう。

講習会ですること

となれば、新CATであるとなしにかかわらず、講習会でやるべきことははっきりしてくる。目録システム操作について、今よりも概念的なことを主に教えていくということになる。そこで起こる問題は新CATにあわせて各種ツールを用意しなければならないことである。ただ、現行講習会で使用しているテキストはよく練られたものであるし、内容的に変わらないので、せっかくのものをむざむざ捨ててしまうのはかなりもったいない。画面を取りかえれば個別クライアント対応版にできるだろう。実際に、このたびの講習会(試行)のために作成されたテキストはそのように構成されている。

無論、一番の問題は開催形態であるが、今はクライアントの数も少数なので、クライアント環境ごとの講習会のかたちを取ることができし、そのほうが便宜できである。いずれ、新CATが普及し、学術情報センターから、プロトタイプのUIPが提供されるようになれば、その環境を利用することになるう。

講習会(試行)テキストと現行システム講習会のテキストの比較

第1講

第1講 目録システム概論 1 目録システムと総合目録データベースの活用 2 図書館システムでの利用 3 カード目録と総合目録データベースのレコード 4 総合目録データベースのレコード間の関係 5 参照ファイル 6 ファイル構成 7 システム操作の概要 8 マニュアル等	第1講 目録システム概論 1 目録システムの基本思想と意義 2 総合目録データベースの構成 3 カード目録と総合目録データベースのレコード 4 総合目録DBにおけるレコード間の関係 5 参照ファイル 6 データベース操作の基本 7 マニュアル類 8 総合目録データベースの活用例
--	---

新CATでは従来のコマンドは関係なくなるので、現行テキストの「6 データベース操作の基本」を「システム操作の概要」として、画面遷移を紹介した部分が削除されている。「8 総合目録データベースの活用例」と「1 目録システムの基本思想と意義」がひとつにまとめられ、全体に順序が若干変わっているが、目次を見てもわかるとおり、内容的な変化はない。あと、細かいことだが、ファイル構成図には、新しく DNARC の記述が追加されている。

画面がないので、理解しづらい部分があるが、目録システムの基本思想(共同分担・オンライン目録)とシステム操作の概要を把握させるという目的は十分果たせている。特定の画面の印象にとらわれない分適度の抽象性があるのではなかろうか。

総合目録DBに対する書誌、所蔵、(典拠)レコードの編集のプロセスを示したフローは中でも、一番重要である。このフローにはシステム操作上でオペレータが判断すべきポイント(書誌を編集する+所蔵を編集する)が2つ明記されていて、テキスト構成の骨ともなっている。後半の登録実習のパターンわけも、このフローをもとに構築されている。

第2講

第2講 目録情報の基準 1 総論 2 書誌レコード 3 典拠レコード 4 所蔵レコード	第2講 目録情報の基準
---	-------------

テキストの要ともいえる部分である。総合目録DBに対する書誌、所蔵、(典拠)レコードの編集を行う上で準拠する基準について学ぶところである。書誌・典拠・所蔵ファイルの、各ファイル構成と書誌・典拠・所蔵レコードのデータ内容の紹介とその作成基準がテーマとされている。これをもとに、第3講、第4講では、データベース操作を検索と登録にわけ個別に具体的な操作を交えながら解説がなされることになる。

構成と内容を見るとやはり現行テキストと変わらない。データ項目は画面ではなく表として掲載してあり、システムの概要を知るといった観点からは、クライアントごとにつくりの違う画面で印象を持ってもらうよりはいいと思う。ただ、クライアントごとの画面も付属させておいた方が親切だともいえよう。ただ、検索する観点から書かれているような感じがするので、データを編集するという観点から注意すべき基準についても、補足する必要があると思う。たとえば、文字セット、区切り記号の意味など、おおざっぱでよいし、コーディングマニュアルのもつ意味もここで伝えておいたほうがよいと思う。細かな相違

点では、ファイル名の変更がある。

第3講

第3講 目録検索 1 検索の目的 2 検索の手順 3 検索用インデクスの種類と作成方法 4 検索キーの入力 5 検索対象ファイル	第3講 検索総論 1 目録検索 2 検索の手順 3 検索画面 4 検索画面の種類と画面項目 5 検索用インデクスの種類と作成方法 6 検索キー入力時の注意 第4講 検索技法 1 検索コマンド 2 検索の流れ 3 検索対象ファイルの自動順序設定 4 検索の実際(1) 書誌検索 5 検索の実際(2) リンク参照
---	--

目録システム操作の前半部分にあたり、つづく第4講とともに、クライアント毎の差異が顕著になるので、テキストのつくりも難しくなる。とはいいながら、現在稼働しているクライアントや開発中のものを、いくつか見てみたところ、おおむね、設計思想が類似しているので、画面を相互に取りかえることで標準化することができそうである。この点は、今回はじめて、iLiswave 以外のクライアントを使ってみてわかったことであった。したがって、第3講、第4講部分は共通・汎用部分とクライアント個別部分とを組み合わせたものにできると思う。

内容的に見ると、現行テキストの第3講と第4講がまとめ、(1)検索の流れと画面と操作、(2)インデクス、検索キー、検索ファイル、にすっきり分けることができている。(1)はクライアントごとに異なる固有の部分とならざるを得ないが、(2)は、現行テキストの3-4、3-5、3-6 にあたるもので内容的には全く同じものである。しかし、(1)(2)の境界ははっきりしているので、やりようによっては、この部分は、クライアント毎に差し替えることもできよう。確かに iLiswave や Looks21(日立製作所)のような画面表示が現行 UIP に近いクライアントから、フィールド表記が日本語のもの(Nalis:NTT データ通信)や、1行1フィールド形式でデータが表示され印象が全く異なるもの(Enicat:新日鉄情報通信システム)など、さまざまだが、これら現段階で開発ないし実用化されているクライアントを見る限りでは、どれもがデータベースに対する操作をアプリケーションでどう実現させるかにおいてほぼ共通した認識を持っているようで、画面の展開も現行システムに似た推移を採用している(今後も類似した設計のクライアントが主流となると思われる)から、画面イメージの差し替えで十分対応できると思われる。

テキストにはない部分では、検索漏れが生じない方法として、検索キーの組み合わせを複数にした方がよいとか、一意的キーの限界を知るとか、また、精度が高いキーを使うと漏れが生じ、逆の仕方をするとノイズが増えるとか、キーそのものがデータにないこともあるとか、旧字体の問題等、検索結果が思ったように得られない場合の理由について、さまざまな事例を挙げ、それをインデクスの作成方法と絡めて簡単な説明を付けておいたりする工夫もあった方がいいかもしい。また、クライアント依存の問題になるが、あと、検索キーをどのフィールドにいれるかといった対照表は示す方が親切かと思う。また、特殊文字記号(EXC 外字)をそれぞれの端末で入力する方法もあったほうがよい(将来的には

クライアント、サーバ両方で UCS 対応されると消滅)。これも、クライアント毎に差し替えることになるが。

あくまで、理解の中心は、適切なレコードをヒットさせるためのポイント2点、すなわち(1)ファイルの連関を知る、(2)なぜデータがヒットするのかのしくみ(インデクスと検索キーの相互関係)の理解にある。

残る細かい変更点は、「検索用インデクスの種類と作成方法」に「検索用インデクス一覧」が追加されたこと、コマンド一覧は削除(新システムにはない)されていること、ストップワードの除去は CATP サーバでは行わないこと、フルタイトルキーが追加されたことなどである。特に、最後の二つは、新 CAT の特長なので重要である。

第4講

<p>第4講 目録登録</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 登録の手順 2 登録の基本的流れ 3 リンク形成の手順 <p>図書登録実習1．所蔵登録</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)所蔵新規入力1 (2)所蔵新規入力2 複数の出版物理単位をもつもの (3)所蔵修正 <p>図書登録実習2．書誌登録</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)書誌流用入力1 書誌階層なし (2)書誌流用入力2 書誌階層あり (3)書誌流用入力3 複数の出版物理単位をもつもの (4)書誌新規入力 <p>図書登録実習3．書誌修正</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)出版物理単位の追加(所蔵修正を含む) (2)その他の修正 	<p>第5講 登録総論</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 登録の種類 2 登録コマンド 3 リンク形成 <p>第6講 図書登録実習1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 所蔵登録 2 書誌流用入力 <p>第7講 図書登録実習2</p> <p>書誌階層のある書誌登録</p> <p>第8講 図書登録実習3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 出版物理単位の書誌登録 2 出版物理単位の追加 <p>第9講 図書登録実習4</p> <p>書誌新規入力</p>
--	---

目録システム操作の後半で登録の手順とリンク関係がメインになり、登録の概念的フローを教えるところである。検索の項でファイル関係は学んでいるので、以下4点を理解する点に注意は集中される。(1)書誌を作成するかしないかの判断基準(流用・新規)、(2)既存の修正するかしないかの判断基準(データ項目の追加)、(3)リンクをつけるかつかないかの判断基準(リンク参照)、(4)これらデータの内容について、記述する文法や記述項目の選定基準があること、これらは、突きつめれば、データを基準に拠って記述する能力を養う基礎知識を得ることといえる。また、第2講の目録情報の基準が具体化する場でもある。画面操作については、クライアント依存なので手引書にゆだねることにし、データに何を追加すべきか、どこに追加すべきか、作成単位はどうするとかは、目録情報の基準と目録規則の話を中心にすることになる。実習をもとに進めるしかないので、具体的にどのような例を用いるか難しいところだが、パターンは次の3つを用意する。そのパターンは、第1講で示されたフローのポイントを考慮した、

- (1)検索、NC にヒット、修正点あれば書誌修正、なければそのまま所蔵登録
- (2)検索、NC にない、書誌流用入力、所蔵登録
- (3)検索、NC にない、書誌新規入力、所蔵登録

の3つになる。

この流れについて、iLiswave、Enicat、Looks21 の画面展開を見てみたが、コマンド(ボタン操作やメニューバーの操作)は当然各クライアント毎に異なるが、流れ的には、いず

れも同じであった。したがって、ここもクライアントの画面を取り替えるだけで個別対応は可能と思われる。

上記のようなパターンわけにすることで現行テキストよりもシステム操作の概念がつかみやすい構成になっていると思う。現行テキストのパターンわけは、画面とコマンドの推移に注意がいらっているので、目次だけ見ると一見してどういう基準なのかわかりにくい構成になっている。(以下参照)

- a. NC ヒット- (必要なら edit) - register - save (6 - 1)、
- b. NC ノーヒット - copy - register - save (6 - 2)、
- c. NC ヒット- linkto p/linkto a - register - save (7)、
- d. NC ノーヒット - copy - linkto p/linkto a - register - save (8 - 1)、
- e. NC ヒット- edit - register - edit - save (8 - 2)
- f. NC ノーヒット - create - register - save (9)

が、(1)書誌があるかないか、あるなら修正の要・不要、(2)ないなら作成、流用か新規か、(3)所蔵の新規か修正か、がシステム操作の基本なのだから、これをより明確にするために PTBL リンク付けや、修正は別項に立てて紹介すればよいとすれば、基本操作はやはり a、b、f となるので、新テキストと同じになる。

補講 1 流用入力時の注意 1 流用入力とは 2 和図書 3 洋図書 補講 2 レコードの削除 補講 3 書誌修正指針 1 書誌レコード修正の方針 2 書誌レコード修正作業の流れ 付録 付録 1 データ記述文法 付録 2 コード表(抜粋) 付録 3 画面構成	補講 流用入力時の注意 1 概念図 2 和図書 3 洋図書 補講 2 リンク先レコード作成 リンク先レコード流用入力 補講 3 レコードの削除 1 所蔵レコード 2 書誌レコード 補講 4 書誌修正指針 1 書誌レコード修正の方針 2 書誌レコード修正作業の流れ 補講 5 参加組織情報 1 参加組織情報の表示 2 参加組織メンテナンス 付録 1 データ記述文法 2 コード表 3 画面構成
--	---

流用・削除・修正についての簡単な注意である補足、付録については、このような形でよいだろう。

まとめ

総合的にみて、クライアント個別部分は画面の差し替えで対応し、システムの概念を理解してもらえらるテキストの作成はできそうである。また、コマンドがない分、概念的な側面を理解しやすい構成にすることができた。基本的に、目録システムの操作を理解することに力をいれることになるので、より丁寧な端末操作はクライアントメーカーが作成するであろう取扱説明書にゆだねることになるだろうが、総合目録データベースに対して何を行いたいのか、何を行う必要があるのかがわかれば、取扱説明書の理解もそう難しくはないだろう。

新 CAT になれば、クライアントのつくりによって作業面では簡単になることが十分考えられるが、カタログをとる、つまり、実際の本を手にして、どのようにカタログ化するかにおける困難さ(目録規則の解釈等)については、何ら変わらないことが見落とされてはいけない。新 CAT 導入が進むにつれ、講習会はそうした観点から構成される必要がある。今回の新システム対応の講習会は、はじめの 1 歩にしかすぎない。(終)

[資料]

- 新目録所在情報サービス対応 目録システム講習会(図書コース) テキスト (文部省学術情報センター、平成 10 年 10 月)
- 目録システム講習会 テキスト 図書編 (文部省学術情報センター、平成 10 年 4 月)
- newcat メーリングリスト
- 宮澤彰「次期目録システムの構想」 <http://www.cat.op.nacsis.ac.jp/INFO/newcat/sympo-94.html>
- (平成 8 年 11 月 21 日に北大で行われた新目録所在情報サービス説明会における配布資料) <http://www.cat.op.nacsis.ac.jp/INFO/newcat/setumeisiryo.html>